

春秋彩

Syunjusai

特集

くまもとで学ぶ!

～熊本県全体がキャンパス～ 3

活躍する卒業生 7

国際交流 8

研究活動紹介 10

大学の動き 12

INFORMATION 13

活き活き元気種 14

人事情報・おすすめの1冊 15



熊本県立大学 月出フィールド内の3本桜

 熊本県立大学

春秋彩とは

万葉集の額田王の春秋を論じた歌の題詞「春山の万花の艶と秋山の千葉の彩」から採ったもの。「春秋」には年月の意味もあり、「春秋に富む」若者を彩る学園の四季を表している。

熊本県立大学広報誌

2010 SPRING

vol. 32

あいさつ



理事長
袁茂 壽太郎

新しい年度も皆さんと一丸となって頑張りたいと思います。

今年は、開学以来最多の受験生が熊本県立大学に集まりました。私は、本学に対するこの関心の高さを種々分析しています。経済的理由から、親近感から、この二つだけではなく期待した教育に出会え、また研究の醍醐味を実感する大学との評価から。この期待や評価に応えなければなりません。

私からは教育研究環境の整備について、基本スタンスに触れておきます。本学のスローガンは「地域に生き、世界に伸びる」です。地域で存在感のある大学であるためには、本学で学ぶことにプライドが持てないといけません。大学の風格と品格です。

また、世界で活躍する人材を育成するためには、先鋭的な研究への出会いと同時に広い視野でのモノの見方、考え方の訓練が重要です。人の心を動かすことで社会に動きが生まれ、活性化することを信じて、新しい年度も熊本県立大学のことを真剣に考え続けます。

就任挨拶



学長
古賀 実

この度、第十二代学長に就任しました。責任の重さに身が引き締まる思いです。本学は法人化後4年を経過し、袁茂壽太郎理事長、米澤和彦前学長のリーダーシップのもと、また教職員の皆様のご協力、保護者の方々の始め、同窓会等関係の皆様のご支援をいただき、大学としての自立性、地域における存在感、そして競争力を高めて来ました。これまでの改革の勢いをさらに活気にあふれ魅力ある大学づくりに活かしていきます。

社会の情勢は若者にとって大変厳しく、学生諸君の努力が報われ難い状況にありますが、失敗にめげない、たくましさを持った学生の育成を目指します。皆様のご協力ご支援を賜りますようお願い致します。



副学長
半藤 英明

学生諸君が「地域に生き、世界に伸びる」この熊本県立大学で為すべきは、まずは「思想を鍛える」ことです。科学技術の進化、高度化に伴う生活環境の変化は劇的ですが、私たちの感情や思考など、人間の内なる世界は変化に乏しいものです。

人間は、自らを鍛え上げることを忘れてはならない。歴史を学び、言葉を磨き、価値観を高める、これが大学生活には不可欠です。生活技能の獲得のみに奔走せず、思想を鍛え、視野を広げ、将来は翼を広げて人間社会というフィールドで活躍できる人間として羽ばたいてほしいと願っています。



文学部長
山田 俊

文学部は平成22年度より大学院英語英米文学専攻に博士後期課程が開設され、学部2学科、研究科2専攻(それぞれ博士前・後期課程)の足並み揃った体制で走り出しました。近年ますます渾沌の体を呈してきた現代社会を乗り切っていくためには、言葉に対する鋭敏な感覚を養い、それを道具として確実な人間関係を築いていくことがより一層求められることでしょう。そうした現代社会を逞しく生き抜いていくことが出来る若者を、文学部は育てて行きたいと思います。



環境共生学部長
有蘭 幸司

平成11年4月に設置された環境共生学部は今年4月で12回目の新入生を迎えました。

知識だけでなく意識の高い地域実学の担い手を輩出すべく、これまでの自然環境との共生、さらに地域の福祉や文化の向上という理念の共通基盤と現場での実証的実践的教育環境を整えたいと考えております。その上で、地域社会と熊本県立大学の発展に貢献すべく、3学科が協働し環境共生型社会の創造を目指した、より深い教育・研究を推進したいと思っています。



総合管理学部長
三浦 章

近年の大学を取り巻く環境は大きく変わり、学生の大学に対する期待もますます多様化しています。そして本学ならびに総合管理学部にとって、今は重要な転換の時期だと認識しています。

本学部教員をはじめ皆様のご支援を賜り、学生一人ひとりの個性を活かした教育体制を整えていきます。その上で、本学部の教育理念を実践し、現実の社会で直面する複雑な諸問題を解決する幅広い見識と能力を持った学生を数多く社会に輩出することを目指します。

特集

くまもとで学ぶ！ ～熊本県全体がキャンパス～

熊本…豊かな自然と風土、歴史とロマン、多彩な文化と伝統。

農林水産業をはじめ、地域の特性にあった多様な産業、

1年後の九州新幹線開通でさらなる可能性が。その全てが学び・研究のテーマ。

熊本県立大学では「地域実学主義」を掲げ、さまざまな教育プログラムを実施しています。

キャンパスとなる熊本は

熊本県は、九州のほぼ中央に位置し、人口は約182万人、面積約7,405km²。山、川、肥沃な平野、そして海と変化に富んだ地形、美しい景観と豊かな自然に恵まれています。農林水産業をはじめ、それぞれの地域の特性にあった多様な産業、人々の生活が生き生きと営まれており、時代の変遷とともに生活スタイルやまちの様相を変えながらも、地域で育まれた伝統・文化が脈々と受け継がれています。

また、本学が所在する熊本市は、平成24年4月の政令指定都市移行に向けた取組が進められており、更に、平成23年春には九州新幹線が全線開業するなど、九州の中核都市としての拠点性がますます高まることが期待されています。

実学の歴史

熊本は、文教盛んな土地柄として、明治初年の調査では寺子屋数が910と全国第5位の数を誇っていたことが知られています。

また、全国に名を知られ115年も続いた藩校「時習館」。幕末期には、政治家・思想家の横井小楠を生み、その実学思想は、熊本洋学校の教育にもつながっていきます。

【熊本洋学校における教育】

石井 容子（2009年度熊本県立大学非常勤講師）

明治4年9月、熊本県は、東京や長崎へ遊学しなくても地元で子供達が洋学を学べるようにと、アメリカ人L.L. ジェーンズを招聘して熊本洋学校を開設しました。

ジェーンズは選抜された士民（武士と一般の人）の子供達に、熟慮の末、通辞を介さず、教師の母語である英語で英語を教えるだけでなく、西洋の科学や文化まで教授する教育方針を取りました。開校直後から、英語の基礎習得をめぐって、生徒の間で激しい競争が始まります。ジェーンズが班別指導をする間、直接指導を受けない生徒は自習をしました。口頭試問に答えることができない生徒は席次を落とし、多くの退学者が出ました。文献によりますと、閉校までの5年の間に、熊本洋学校は、創立当時の英学小学校という位置付けから、中等教育、さらに高等教育を行う学校へと移行します。これは、ジェーンズが熊本の近代教育に貢献したことを伝える資料の一つだと言えます。



文学部の「くまもとで学ぶ」

文学部 教授 吉井 誠

文学部における「くまもとで学ぶ」取組みとして、「地域に根ざした学び」と「熊本で世界と向き合う」活動のいくつかをご紹介します。

「地域に根ざした学び」の例としてフィールドワークが挙げられます。日本語日本文学科では、講義の一環として単位を修得できるフィールドワークの授業「地域踏査演習」を開講しています。バスを使って文学関係史跡を巡っていますが、平成21年度には太宰府・柳川において「万葉集と憶良・旅人」「菅原道真、人と作品」「天神信仰と連歌」「江戸時代の柳川」「北原白秋」という5つのテーマについて事前学習をして、踏査を行いました。この地域踏査演習以外にも、文学散歩、地域文献調査、自治体との共同研究など、さまざまな地域に根ざした実践的教育の試みをしています。

文学部では教員志望の学生が多いのですが、4年次に行われる教育実習以外に、地域の高校における教育体験の機会を設けています。高大連携の一環として連携校において学生は先生方の授業・指導を身近に観察し、また自らも授業の一部分を担当するなど貴重な経験をすることができます。平成21年度英語英米文学科では連携校の第一高等学校において、英語科教育法を受講している学生たちが授業参観をし、授業後に高校の先生方と日々の授業や生徒指導についてお話を聞く機会が与えられました。

「熊本で世界と向き合う」活動として海外からの留学生との交流が挙げられます。協定校の韓国の祥明大学校、アメリカのモンタナ州立大学の学生を迎え、日本語の授業の実施、異文化理解を目的とした交流が行われています。モンタナからの学生は英語英米文学科の授業に参加し、与えられたテーマを中心に学生と英語でディスカッションを行っています。また平成21年度にはアメリカのメリーランド州アナポリス市にある海軍大学校の学生が来校し交流を持つ機会がありました。学生が中心となり企画し、お互いの大学や地域の紹介をし、さまざまなトピックについて英語で話し合うことができました。英語英米文学科ではフィールドワークの一環として、国際交流会館を訪れフェアトレードについて勉強したこともあり、熊本において世界を学ぶ機会を大切にしています。



太宰府・柳川において地域踏査演習



モンタナ州立大学の学生を迎え異文化理解の交流



アメリカ メリーランド州海軍大学校の学生との交流

環境共生学部「くまもとで学ぶ」

環境共生学部 教授 大和田 紘一

環境共生学部のフィールドワーク 「有明海(熊本県)のノリ養殖と加工場現場の視察」

環境共生学部では1年生にフィールドワークの履修を課しています。このフィールドワークは各教員一人ひとりが独自のテーマを学生に公開して、学生は3学科各教員のフィールドワークを少なくともそれぞれ1課題ずつ履修することが義務づけられています。このようにして、環境共生学部に入学生には自然環境と私たちの生活に関連したさまざまな活動を見、また体験をしてもらおうという趣旨で行われているのです。

平成12年のシーズンに起こった有明海のノリの色落ちと大変な不作は、私どもにはまだつい先日のように記憶されていますが、大学1年生にとっては、まだ小学校の低学年だったので、あまり記憶を持っていないようです。そこで有明海は日本一のノリ生産の場所であること、またノリ養殖はノリの生活サイクルを上手に利用して日本人がすでに400年間も行っている海の産業であることなど、現場を見ながら知って欲しいということから、私の研究室では毎年企画しています。

熊本市河内町の河内漁業協同組合をバスで訪問し、まずボートに乗ってノリ養殖現場に連れて行っていただき、冬の寒い中で養殖が行われている現場を見て回ります。浅い場所では支柱式養殖のポールが沢山立っていて、そこにノリ網が取り付けられています。干潮時にはこの網が水面よりも高いところに出て来るので、陸からも良く見られる光景です。一方、水深の深い場所では、浮き流し養殖といって、海底のアンカーにつながれた養殖網が水面に張られています。この広大な海の畑は長崎県との境界まで広がっていて、そこをボートに乗って見て回るのはとても爽快で、寒風にさらされながらも喜んでもらっています。

次には陸上に揚げられた養殖ノリを、私たちが食べているような板ノリに加工している現場を見せてもらいます。水揚げされたノリはすべて全自動の機械により、水洗、ミンチでの細断、板状に分配された後、2～3時間をかけてゆっくり乾燥されたものが、製品となって次から次に出てきます。

ここで加工されたノリは箱詰めされて、漁業協同組合に持ち込まれ、検査官によって厳しい品質検査が行われています。品質、色沢、香味、重量などで50以上の等級に分けられ、それによって入札時の値段も変わってくるとのことです。さすが日本の伝統食品の一つといえます。このような作業が、有明海を取り巻く海岸で広く行われていることを学んでもらいます。

河内漁業協同組合の参事 村上清孝さんと、県水産研究センターの元技官で、現在は河内漁協などのノリ養殖の指導をしておられる山本文市先生には毎年大変お世話になっています。



ボート2隻に分乗して、ノリの収穫風景を見る



しっかり成長したノリ



ノリの品質検査



総合管理学部の「くまもとで学ぶ」

総合管理学部 教授 中宮 光隆

総合管理学部は、大学の教室で行われる講義や少人数で議論をしようゼミナールを重視していますが、それだけではなく、同時にフィールドワークといって、大学から出ていろいろな地域に出向きさまざまな体験をすることも重要だと考えています。たとえば人吉・球磨地域のまちづくりや地域活性化を考えるために、人吉・球磨地域まで実際に行って自分の目で街を見たり、地元の企業経営者や市民・市役所の方からお話を聞いたりして、自分の頭で考え、プランを立て、後日また現地に出かけて報告会を行います。人吉・球磨地域だけではなく、熊本市内の古町・新町に残る歴史的にも貴重な建物などの文化財を活かしたまちづくりを考える、菊池市内の養鶏場で畜産の企業化や地域活性化を考える、水俣でワインづくりや温泉・魚釣りなどの資源を活かした観光立県を考える等々。

なぜ、フィールドワークを重視するのでしょうか。社会(世界や日本)の中で生じるさまざまな出来事、そこでは多種多様な課題の解決が求められています。課題を解決したところに、社会の発展と人々の生活向上があるからです。国際化、情報化、高齢化が急速に進む時代、ますます多様化・複雑化する社会の中で生じる諸課題を解決するためには、一人ひとりに広い視野と総合的で創造的に判断する能力や高度なスキルが求められていますし、それとともに多くの人々の協力・協働も必要です。この点での知識やスキルを学び、そのための能力向上をめざすのが、総合管理学部です。

本学部の場合、学問の素材はその対象が社会の中で発生する諸課題ですから、熊本県内外にいつでもいくらでも求めることができます。県立大学であることは、その点で好都合です。多くの県民が自分のことのように考え、応援や協力をしてくれるからです。私たちの大学・学部は、いわば「熊本県内、すべてがキャンパス」なのです。企業や行政で活躍する人材を育てる総合管理学部とそこで学ぶ学生や研究する教員にとって、「くまもとで学ぶ」意義は大きいのです。



フィールドワーク【ロボットとくらし】



KUMAJECT最終報告会

KUMAJECT

KUMAJECTとは、熊本の人吉・球磨地域を対象に、熊本県立大学総合管理学部の学生が取り組む、学際的・総合的教育プロジェクトという意味で、その活動内容は、“現実の課題(地域が抱える課題)”に対して、約30名の学生たちが、さまざまな専門分野の教員の指導を受け、総合管理学部の教育理念の一つである「学際的・総合的なアプローチ」で調査・研究し、解決方法を考え、提言・実践するプロジェクトです。



KUMAJECT現地調査



国際交流 熊本で世界と向き合う International

世界を学ぶ

総合管理学部 進藤三雄 教授は、2008年9月1日から2009年8月31日にかけて、オーストラリアに留学されました。
留学先：オーストラリア・シドニー大学

Appraisal理論を使ったメディア分析 【海外研修報告】

総合管理学部 教授 進藤 三雄

昨年9月に、オーストラリア・シドニー大学での1年間の研修を終え帰国しました。シドニー大学は1851年に創設されたオーストラリアで最も古い大学で、シドニーの中心から南に2キロほど離れたところにあります。生徒数は約3万人でそのうちの16%が留学生です。キャンパスではさまざまな国籍の学生が歩き、オーストラリアのマルチ・カルチャー社会を象徴しています。

オーストラリアでは2000年にオリンピックが開催され、その後移民の受け入れを積極的に進めたことなども影響してこの10年間で急速な経済成長を遂げました。一方で都市部を中心に住宅不足や物価の上昇を招いてしまいました。シドニーで暮らし始めて間もなくリーマン・ショックが起こり、知り合いの日本人駐在員も次々に本国に引き揚げていきました。私が通っていた大学でも、キャンパスを歩いていて英語以外で聞こえてくるのは中国語や韓国語ばかりで、以前あれだけいた日本人学生の姿はほとんど見られませんでした。

実は私は90年代にも学生としてシドニーで生活したことがあるのですが、当時は強い日本経済を背景に日本語ブームが続き、多くの高校で日本語が教えられていました。街を歩いていてもオージー達によく、「コンニチハ」とか「イチバン! (英俗語で“かゆいおしり”の意味)」などの片言の日本語で声をかけられたものです。彼らはアジア系の人ならだれかれかまわず同じことを言うので、中国系や

韓国系の人が困っている姿をよく見かけました。ところが今回私が声を掛けられたのは「ニーハオ」だけで、長い日本経済の低迷を実感してしまいました。

今回の留学で、私は以前の指導教官であるJim Martin教授と再会し、彼から選択体系機能文法に関する多くの貴重な助言を得ることができ大変幸運でした。2008年10月には、Free Linguistics Conference 2008がシドニー大学で開催され、体系機能文法の大家であるHalliday教授やHassan教授などの指導を直接受けることができたことも大きな収穫でした。

研究の中心はJimが中心となって提唱するAppraisal (言語評価)理論について学び、それを応用したメディア分析を行うことでした。Appraisal理論とは談話分析のひとつの方法で、簡単に言えば話し手や書き手の感情表現や価値判断の表現が、ジャンルの異なるテキストではどのように違うかを分析するものです。例えば法律文書に比べ法律相談がなぜ面白いのか、論説文と報道記事における価値判断の種類や使用頻度はどう違うかなどを比較します。その研究は、効果的な文章の書き方や状況に合った話し方の研究につながるものです。研修期間中は、大学院生のクラスや研究会にも積極的に参加し、新しい方法論や斬新な研究の取り組みに触れることができ大いに刺激を受けました。また、今まで書き貯めてあった日本語文法の原稿に手を加え、Basic Japanese Grammar with Exercisesとして出版できたことも自分にとって大きな収穫でした。

今回私の在外研修を許していただきましたことに対し、関係各位にこの場を借りて改めてお礼申し上げます。今後は研修の成果を可能な限り本学の教育・研究に活かしていきたいと考えております。



シドニー大学のキャンパスで



中国とマレーシアからの研究員と 中央が本人

熊本県立大学では、「国際性の推進」を三大理念のひとつに掲げています。その理念をより具体化するため「国際交流ビジョン」を策定し、「学生」、「学術研究」、「地域」、それぞれの視点から全学的に国際交流活動を推進しています。

熊本で国際交流

熊本県立大学には、異文化交流活動を行う「国際倶楽部」という10年以上の歴史あるサークルがあります。その活動内容についてご紹介します。

サークル「国際倶楽部」

部長 中村 綾乃さん（総合管理学部2年）

私たちは異文化交流を活動目的とする国際倶楽部というサークルです。昨年の活動内容を紹介したいと思います。

6月にはアメリカのモンタナ州立大学からの短期留学生との交流をし、留学生のプログラムの一部に国際倶楽部の時間を貰って、一緒に野外でのスポーツを楽しみました。7月には韓国の祥明大学からの短期留学生と一緒に懇親会を行うなど、このような機会に留学生と仲良くなって今でも連絡を取り合ったりしています。

最近では、阿蘇で行われた異文化交流事業に参加し、主に東南アジアの方々との交流をしました。そこでは、アラビア文字を教えてもらったり、外国の料理と一緒に作ったり、餅つきをしたりしながら交流を楽しみました。

このほかにも留学生を交えてのスポーツデイの開催など、さまざまな活動を行っています。

また、サークルの活動外にも「華友会」という中国帰国者支援団体の活動に参加しています。中国帰国者やその家族の方々等へ毎週1回行う日本語教室のお手伝いをしています。

こちらの活動は、国際倶楽部の有志が参加しているもので、これまで延べ100名以上の方が日本語を学習してきました。

日本語教室に来られる方々は、主に日本人男性と結婚して来日した中国人女性や技術研究生、仕事の都合で家族と日本に来た方々など地域に住む外国人の方の参加が増えています。

そのなかで、私たち学生ボランティアは主に中高生への教科指導・学習補助をマンツーマンで行っています。彼らはいわゆる私たちが通ってきたような普通の公立学校に通って、同世代の日本人の子供たちと同じように授業を受けているので、言葉のせいで理解が追いつかなかったり、課題を解く際に問題文そのものに引っ掛かったりしてしまふことがあります。そういった疑問や引っ掛かりを解消し、学習の手助けとなるようにお手伝いしています。あまり堅苦しくなく、みんな仲がよくて楽しく和やかな雰囲気です。

このように、私たちはさまざまな活動を通して、日本と外国との違いに驚いたり、学んだりしています。外国に友達を作りたい! 異文化交流をしたい! 日本語を教えてみたい! と思っている方にぴったりのサークルです。



モンタナ州立大学ピリングス校短期留学生との写真 中央が中村さん



日本語教室の様子



阿蘇での異文化交流事業参加

研究活動紹介



環境共生学部 教授
有蘭 幸司

Profile

長崎大学大学院薬学研究科(修士課程)修了。
博士(薬学)。
博士研究員(米国サウスダコタ大学)、
長崎大学助教授などを経て、1999年4月から現職。
日本学術会議連携会員。

ヒトと 地球環境との 共生に貢献する研究



第40回宮田記念学術論文賞を受賞

環境共生学部食健康科学科に在籍し、食環境安全性学を専門に食品衛生、環境衛生、公衆衛生など衛生化学(生命を衛る化学)全般に渡り、ヒトと地球環境との共生に貢献する実学を意識し研究しています。

具体的には、水棲生物及び無脊椎動物を利用した食品関連化合物、環境化学物質の内分泌かく乱作用機構の解明、生態影響評価法の確立、機器分析手法とバイオアッセイ※1を活用した食品中の農薬汚染などの食環境安全性評価手法の開発を行っています。

これらの研究は文部科学省や環境省の科学研究費を中心に、厚生省、農水省、内閣府さらには北九州市等からの研究支援も頂いています。研究成果は、毎年、学術論文は内外の英文の専門学術雑誌に10報前後、学会発表(国内・国際学会:口演、ポスター)は他の研究室との共同研究も含めると30報以上報告しています。現在、熊本県立大学赴任後の成果をもとにした和洋論文・著書は玉石混濁ではありますが170報を超えています。以下個々の研究内容を紹介します。

メダカ、キンギョ、アフリカツメガエルを利用した エストロゲン作用評価手法開発と内分泌かく乱作用評価手法の開発

この研究では、当初キンギョを用いて環境化学物質、特にエストロゲン※2作用を持つ化学物質の生態影響を評価する手法を開発し、実際フィールド調査を行いました。

また、メダカやキンギョなど小魚を用いた化学物質のエストロゲン活性を評価する際、実験小魚用飼料中に含まれる化学物質や植物エストロゲンが影響を及ぼして

いることを指摘し、ホルモンの活性が低く環境化学物質の汚染が少ない小型魚用半合成飼料を開発しました。この飼料の開発によって、より精度よく化学物質によるエストロゲン、アンドロゲン※3、甲状腺ホルモン作用が認められるようになり、OECD(経済協力開発機構)の魚試験法においてその有用性が高く評価されています。

センチュウ、アミ等無脊椎動物を用いた化学物質の生態影響評価法の確立

主にセンチュウを用い化学物質の急性毒性を評価する手法、内分泌かく乱を切り口にした新しい生態毒性(成長、成熟、多世代影響)検出法を提案しました。遺伝子情報がそろっているセンチュウの強みを生かし、いち早くDNAマイクロアレイシステム※4を導入し、自作チップを用いて生体影響作用を効率よく検出する手法

を組み上げました。

これらの手法は、生薬成分の抗酸化作用や医薬品との相互作用など、食品中機能性成分の安全性・機能性評価法の確立に繋がっています。

また、アミを用いた化学物質の内分泌かく乱作用と生態毒性評価手法開発も行っています。

医薬品生活関連物質の動態解析

我々が日常的に使っている抗生物質や解熱鎮痛剤などの医薬品や化粧品等のパーソナルケア製品起源の化学物質(PPCPs: Pharmaceuticals and Personal Care Products)が、微量レベルで下水処理水、河川や湖沼等の水環境中から検出され、新たな環境汚染物質

として注目されています。そこで、熊本県内の河川や下水処理場の流入水および放流水を対象に化学物質の実態把握、挙動および除去性等について調査を行いました。また、韓国のMankyung river流域の下水処理場の汚染実態についても調査し報告しています。

医薬品生活関連物質の生態(生体)影響評価

ビスフェノールA(BPA)やノニルフェノール(NP)関連化合物について、動態解析と生態(生体)影響評価など詳細に検討を加え、又、BPA代謝物のMBPが新しく体内で生成されるだけでなく、ポリカーボネート製食器から溶出する可能性を示し、MBPはBPAより毒性、エストロゲン作用が100-1000倍強く、一般に知ら

れているBPAの内分泌かく乱疑似作用がMBPなど関連混入物に寄与して示した可能性を示しました。手洗いの抗菌石けんに含まれているトリクロサンや難燃材PFOS、PFOA、テロマーアルコールの生態影響についても先駆的な研究を行っています。

機器分析を用いた食環境安全性評価

BPAやNPの容器からの溶出や食品中の食品汚染物質について簡易前処理法と相対定量データベースを用いて調査し、缶詰や学校給食素材の食品への汚染実態を報告しました。

また、廃棄物に対する住民の不安感を払拭し、予防原則に基づいたより安心・安全な循環型社会の形成を推進するため、環境に対する化学物質負荷の増減をより

定量的に把握することを目指した研究に取り組んでいます。特に最終処分場の土壌や浸出水を対象として化学分析で有害物質から予測される毒性影響について、その可能性を検知するデータベースの構築と包括的な化学物質のリスク管理・リスクコミュニケーション手法の開発に取り組んでいます。

食育に関する調査研究

熊本県及びくまもと食の安全安心県民会議と協働した食の安全・安心に関するリスクコミュニケーション、そして食育推進に関する調査研究を行っています。

この中で内分泌かく乱解明研究に関する一連の論文は、平成18年3月に日本薬学会からの推薦で第40回宮田記念学術論文賞(宮田専治学術振興会)を頂きました。これらの研究は多くの国内外の共同研究者の支援や研究室で研究に従事してくれた研究員、大学院生、学部学生諸君の真摯な研究への情熱に支えられた成果です。

また、十分な研究環境を整備頂き、研究を支援していただいている熊本県立大学の事務局職員の方々にも改めて感謝したいと思います。今後も「極めんと欲すれば休息なし」を座右の銘とし、一日暮らすことは一歩進むことでありたいと思って精進していきたいと思っています。

用語解説

- ※1 ● **バイオアッセイ**
生物材料を用いて生物学的な応答を分析するための方法
- ※2 ● **エストロゲン**
ステロイドホルモンの一種。一般に卵胞ホルモン、または女性ホルモンとも呼ばれる。
- ※3 ● **アンドロゲン**
ステロイドホルモンの一種。一般に雄性ホルモン、または男性ホルモンとも呼ばれる。
- ※4 ● **DNAマイクロアレイシステム**
DNAを多数固定化し、それらに相同性のあるDNA・RNAを一度に検出・定量する方法
- ※5 ● **ビスフェノールA(BPA)**
2つのフェノール部位を持つ芳香族化合物で、ポリカーボネート製のプラスチックを製造する際や、エポキシ樹脂の原料として利用されている。
- ※6 ● **ノニルフェノール(NP)**
アルキルフェノール類に分類される有機化合物で、ゴム用老化防止剤、酸化防止剤の原料として用いられている。
- ※7 ● **MBP**
ビスフェノールAから生成する活性代謝物。正式化学名は、「4-メチル-2,4-ビス-(p-ヒドロキシフェニル)ペンタ-1-エン」。



有蘭研究室を中心とした共同研究グループ(長崎大学、有明高専)



もやいすと育成プログラムの阿蘇での輪地切り風景

熊本県立大学が全国1位に！ ～「大学の地域貢献度ランキング」～

日本経済新聞社が平成21年9月に行った「第4回大学の地域貢献度ランキング」で、熊本県立大学が全国1位と発表されました。

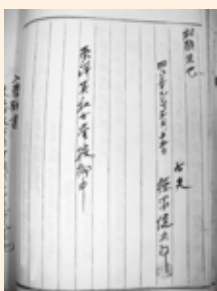
このランキングは毎年行われているもので、本学は第1回13位、第2回10位、第3回2位と年々順位を上げてきました。

本学が取り組んでいる「地域に根ざした教育・研究活動」「地域でのインターンシップ実績」「地域の方々への各種講座や施設の開放」などが高く評価され、今回は、全国475大学・大学院大学(国立78、公立65、私立332)の中でトップとなりました。

蘆花研究プロジェクトがさらに進展 — 徳富愛子の新資料発見 —

熊本県立大学は、熊本県立大学蘆花研究プロジェクトを組織して、郷土の文学者、徳富蘆花の研究を推進しています。

蘆花がトルストイを訪ねた明治39年(1906)の「順礼紀行」の最中、その妻愛子が「鳥居坂の英和女学校に寄宿」したとの蘆花の葉書(本学所蔵)の記述内容を確認する過程で、愛子の東洋英和女学校(現 東洋英和女学院)への入学願書、在学証書等、学内資料の存在を確認しました。蘆花不在の間、愛子が女学校でどのような勉強をしていたのかが分かる貴重な資料です。



徳富蘆花直筆の入学願書

愛子の職業が著作業となっているのは、蘆花が愛子の文才を高く評価していたことを示しています。

【東洋英和女学院 所蔵】



熊本県立大学・合志市 包括協定調印式



我が校と合志市包括協定調印式

公立大学法人熊本県立大学と 熊本県合志市が包括協定を締結

平成22年2月4日に公立大学法人熊本県立大学と合志市が包括協定を締結しました。この協定は、公立大学法人熊本県立大学と合志市が、包括的な連携のもとに、人材育成やまちづくり、地域づくり活動、環境共生活動等さまざまな分野において、相互に協力することを目的とするものです。

今後、熊本県立大学と合志市は、

- (1) 人材育成やまちづくり、地域づくりのための連携
 - (2) 環境共生活動のための連携
 - (3) 地域産業、教育文化振興のための連携
- などに取り組んでいきます。

平成22年4月から熊本県立大学大学院 文学研究科博士後期課程 (英語英米文学専攻)を開設

熊本県立大学では、大学院文学研究科英語英米文学専攻に、これまでの修士課程を基盤としつつ、深い学識を具えた研究者及び高度専門職業人の養成を目的とした、博士後期課程(英語英米文学専攻)を開設しました。

これを記念して、平成22年2月20日に博士後期課程開設記念シンポジウム「学びの継承 ～学部から大学院へ～」を開催しました。

学部、大学院博士前期課程、博士後期課程までの一貫した教育・研究の体制が整い、言語と文学の探究をどのように継承し深めていくか、学生も交えて討論を行いました。



活き活き
元気種！
だね

このコーナーでは、サークル活動をはじめ、
地域で活躍する熊本県立大生の声をお届けします。

「食」を広い視点で考えます 実学主義で活動中！

食の探検隊

食健康科学科は、環境共生の視点から、自然にやさしく、地域の環境特性を考慮した「食と健康」について研究しています。「食の探検隊」は、そんな食健康科学科の学生46名(4年生12人、3年生1人、2年生13人、1年生20人)で構成される任意のサークルです。

活動盛んな「食の探検隊」について、部長の田中さんにお話を伺いました。



食の探検隊 部長
田中 渚さん

(環境共生学部
食健康科学科2年)



食料自給率考える活動
熊本の食材を使い調理

今日、食についての問題は絶えず、安全・安心への関心は高まっています。食をめぐるさまざまな問題解決のために、現場の声や現状を知る必要があります。積極的に知識や理解を深め、整理し解決策を探るために“食の探検隊”が発足されました。「食」を、食べ物の摂取、栄養学的な観点からみるだけでなく、食べ物が供給される背景にも目を向け、「環境との接点」、「安全・安心」、「食料生産」について考えています。

活動内容は、食の課題を理解し、解決につなげる体験活動、マスメディアに惑わされない、環境や食の本質を理解するための勉強会および講演会、得た知識を咀嚼するための討論会を行っています。

世界や日本、熊本県の食料自給率について比較し、なぜ日本の食料自給率が低いのか考えたり、フードマイレージという考え方や地産地消の重要性について考えたりしました。すべて熊本産の食材を用いて料理を作りました。その食材ごとの食料自給率をみると、一桁台のものから100%のものとさまざまあり、食料自給率が低い食材を入手するのが大変で、値段が多少かかるといった問題もありました。

また、阿蘇地方青年農業者クラブの方に圃場を案内してもらい、行われている農業を見学したり、意見交換会を行ったりしました。温泉熱を利用したバラ栽培や褐毛和種牛の放牧を行っている農場を実際に見学しました。農業の現場を訪れて、学校での座学では学べないさまざまなことを体で感じ、学ぶことができました。

他にも、環境における森林の重要性が高まっている中、森林を脅かす放任竹林問題や林業の後継者不足などの問題をただ耳に聞くだけでなく実際に現場に行き、自分たちの目で確かめ体験することが必要だと考え、熊本県が行っている森林保全活動に参加し、環境にも目を向けた活動も行いました。生命力の強い竹林は森や畑に侵入しヒノキやスギを枯らす可能性があることから竹の伐採を行い、伸び放題だった森林に光を入れるための枝打ちも行いました。

ただ活動を行うだけでなく、活動後には討論会をして、みんなの意見や感想を交換して、得た知識や情報を自分のものにしたり、さまざまな意見や感想に触れ、さらに考えが深まるようにしています。

今後も、さまざまな活動を通して多くの知識を深めていこうと思います。



森林保全事業
枝打ち



阿蘇地方青年農業者クラブとの交流
褐毛和種牛の放牧

■採用

〈文学部〉

日本語日本文学科 准教授 五島 慶一

英語英米文学科 准教授 リチャード・レイヴィン

〈環境共生学部〉

環境資源学科 助教 小森田 智大

居住環境学科 准教授 桑田 豪

食健康科学科 教授 福島 英生

食健康科学科 准教授 渡邊 純子

食健康科学科 助教 赤星 亜朱香

〈総合管理学部総合管理学科〉

パブリック・アドミニストレーションコース

准教授 澤田 道夫

ビジネス・アドミニストレーションコース

講師 山西 佑季

情報管理コース 助教 山ノ口 崇

地域・福祉ネットワークコース 教授 荒木 紀代子

地域・福祉ネットワークコース 准教授 重永 康子

■就任

学長 古賀 実

副学長 半藤 英明

■学外理事・委員就任

公立大学法人理事

横田 剛 (再任)

公立大学法人経営会議委員

小栗 宏夫

福田 興次 (再任)

本田 榮子 (再任)

安田 公寛 (再任)

公立大学法人教育研究会議員

河原畑 廣 (再任)

渡辺 満利子

■学部長就任

文学部長 山田 俊

環境共生学部長 有蘭 幸司

総合管理学部長 三浦 章

■研究科長就任

文学研究科長 村里 好俊

環境共生学研究科長 堤 裕昭

アドミニストレーション研究科長

黄 在南

■センター長就任

地域連携センター長

環境共生学部 教授 篠原 亮太 (再任)

学術情報メディアセンター長

総合管理学部 教授 津曲 隆

キャリアセンター長

文学部 教授 山崎 健司

保健センター長

文学部 教授 田中 宏尚 (再任)

■昇任

環境共生学部 教授 張 代州

環境共生学部 教授 白土 英樹

総合管理学部 教授 進藤 三雄

総合管理学部 教授 吉村 信明

総合管理学部 教授 井田 貴志

総合管理学部 教授 宮園 博光

文学部 准教授 大島 明秀

文学部 准教授 坂井 隆

総合管理学部 准教授 小蘭 和剛

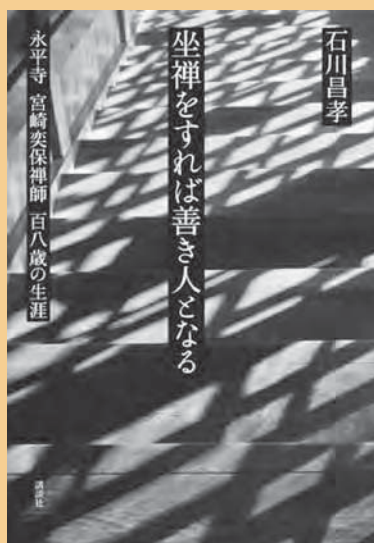
おすすめのー冊

座禅をすれば善き人となる

ー永平寺 宮崎奕保禅師 百八歳の生涯ー

石川昌孝 著

株式会社講談社 2008年



巷では生き方に関する本がよく売れているらしい。売れている理由はわからないが、生き方に悩んでいる人が多いのは事実であろう。とつきの昔に不感が過ぎた私も同じで、日々の生活のあやに惑わされなかなか前に進めず、心にかかった霧がはれる効き目のある処方箋を求めて、一先ず本屋をさまよう。そのとき、偶然目に入ったのが本書である。

私は、大ざっぱにいうと理屈を飯の種としている。とはいえ、日々の生活の中で、自分の理屈が通れば嬉しいし通らないといういらする。それで終わればいいが、牛の反芻のように何度も思い返す。思いながら立ち止まる。このような自分の不憫さを諭すように宮崎禅師はいう。「『ああせよ』と口で言うより、『こうせよ』として見せることこそ教えなりで、して見せなきゃしょうがない……『ああせい、こうせい』と言うたって、誰も言うこと聞かん。自分がして見せないといかんのや」(同書、167頁)。言うのは手取り早い、してみせるのは面倒くさいし時間がかかる。しかしそれを平気でやっていく。それが宮崎禅師の人間としての生き方のように思われる。

さらに、宮崎禅師はいう。「真理を黙って実行するというのが、大自然だ。誰にも褒められたくも思わんし、これだけのことをしたら、これだけの報酬がもらえるということもない。時がきたならば、ちゃんと花が咲き、そして、褒められても、褒められなくても、すべきことをし、黙って去っていく。そういうのが実行であり、教えであり、真理だ」(同書、236頁)。

本書は、人間の英知では到底測ることができない大自然の営みの中に、生き方の生きた処方箋があることを教えてくれているような感じがする。



総合管理学部 教授
黄 在南

熊本県立大学ギャラリー

熊本県立大学に収蔵する貴重資料を紹介します。



本学日本文学研究室蔵

【百人一首像讃抄】

現代においても、正月のかるた競技で広く親しまれている『百人一首』。藤原定家撰とされていますが、広く読まれるようになるのは室町後期から。江戸時代には、その注釈本が各種出版されましたが、本書は細川幽斎の注に菱川師宣の絵を配した絵入り本です。刊年は不明ですが、江戸後期のもの。一首一首に歌人の肖像と、歌にちなむ情景が描かれています。ちなみに、今年は幽斎の没後四百年目にあたり、本学でも記念シンポジウムを今秋に開催の予定です。

解説：文学部 教授 鈴木 元

ART TOPICS

中学生絵画コンクールを実施しました！

熊本県立大学では、大学と中学校との連携事業として、平成20年度から県内の中学生を対象に「環境」に関するコンクールを実施しています。

平成21年度は、「環境と私たちの未来」をテーマとする絵画コンクールを実施し、県内の中学校25校から430作品のご応募をいただきました。

■最優秀賞「霊台橋」

小松 美波さん(熊本市立出水南中学校2年)



「春秋彩」へのご意見・ご感想をお待ちしています。

本誌についてのご意見・ご感想を下記までお寄せください。
いただいたご意見は、今後の広報誌編集の参考にさせていただきます。

〒862-8502 (住所記載不要)

熊本県立大学企画調整室「春秋彩」担当行

FAX 096-384-6765 E-mail kikaku@pu-kumamoto.ac.jp



発行：熊本県立大学

〒862-8502 熊本市月出3丁目1番100号

TEL 096(383)2929(代)

<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/>

再生紙を使用しています



この印刷物は大豆インキを使用しています